

語り継ぐ  
日本の都市環境デザイン

## コラボレーションの仕組みをデザインする



曾根幸一 Kouichi Sone

1936年静岡県生まれ。1959年東京藝術大学卒業後、東京大学大学院工学研究科を修了し、1964年から同助手。1968年環境設計研究所を設立。幕張ベイトウンほか、多数の都市デザインを实践。1991年芝浦工業大学システム工学部教授に就任、2003年から同学部長。2007年NPO法人景観デザイン支援機構の設立に参加し、代表に就任（現在、顧問）。2010年杉並建築会を発足。JUDIには設立前から携わる。

2015年4月13日(月) 14:00~16:00  
環境設計研究室にてインタビュー

## 芸術家対工芸家

—JUDIの設立にはどのように関わられたのでしょうか？

**曾根：**JUDIの創設が1991年とありますが、準備でかなりぐずぐずしていました。言い出しっぱは私のほか、土田旭、加藤源、南条道昌など東大の都市工学科の創設期に周辺でうろろしていた人たちだったと思います。間もなくGK設計の西澤健さんが仲間に入ったと記憶しています。私はこの直後に新設の学部を創るといので芝浦工大に誘われたため、ほとんど活動できませんでした。いま、この研究室はJUDIでも活躍されている中野恒明さんに引き継いでもらっています。岸井隆幸さんのレポートを読むと、建設省（現・国土交通省）との窓口は加藤源さんだったようですね。岸井さんは私たちより一回り以上若い世代で、私の事務所にも来られたことがあります。賢そうな学生だなと思った記憶があります。彼が役所側で頑張ってくれていたのですね。

—当時はどのような思いでJUDIをつくられたのでしょうか？

**曾根：**都市デザインはコラボレーションなくしてはできないけれど、皆さん業態が違うんですね。私は建築+都市デザインという形態の事務所を設立して、建築の設計に比重がありましたが、私以外の皆さんは、いわゆる「都市計画コンサル」を立ち上げて、すでに多くの成果を上げていました。しかし、都市・建築界周辺の異業種の人たちが下請的に仕事をしているのはおかしい。これは対等のコラボであるべきだから、中間的な情報交換の団体が必要ではないか、というのがJUDIのスタート時の目的でした。ちょうどソ連が崩壊してバブル経済が終わる頃ですかね。

ご承知のように、かつてイギリスにはW.モリスの「アート&クラフト運動」があり、ドイツにはW.グロピウスの「バウハウス」がありました。例えば、グロピウスはそこで手仕事の・職人的なものの復権を目指していて、「工芸家と芸術家との間に高慢な壁を築いて階級を

区別するような越権行為を排し、工芸家の新しいギルドを結成しようではないか」と言っています。モリスは「機械対手仕事」、グロピウスは「芸術家対工芸家」で、時代も内容も違いますし、少し大袈裟だけど、気分的にはこういうものと似ていたように思います。

創設時の私たちは50代で、先輩方を排除する訳ではないけど、権威的になる人を避けたいという理由から55歳以上はダメだとか言って、若い人に集ってもらう団体をイメージしていました。間もなく南条道昌さんが「モニターメッセ」なるイベントを開発し、団体の継続に貢献したと記憶しています。当初は全国的な団体にまで成長するとは思っていませんでしたね。

## 任意団体とNPO法人の両輪

—JUDIの活動と並行してTDAも創設されていますね。

**曾根：**私が芝浦工大を退任したのは2005年ですが、それとほぼ同時に八木健一さんから「JUDIは任意団体で委託業務ができないからNPO団体が必要だ」と口説かれて、1年近く準備をして、TDA（NPO法人景観デザイン支援機構）なる団体を立ち上げ、最初の代表にさせられました。TDAは年会費1万円で、あとの半分は材料メーカーや不動産会社などからの支援で賄っています。JUDIとはお金をお互いに払いあっていて姉妹団体になっています。

活動の内容としては、「景観文化」と言うA4・4ページ（ときには6ページ）の機関紙を発行しています。どちらかと言えば、難しい議論は避けて市民向けを意識した内容になっています。Town Design Aid（TDA）という命名は倉田直道さんなどの発案です。私のあとの代表は土田旭、高橋徹と2年ずつやって、今は宮沢功さん（元GK）にお世話になっています。代表を終えたら、今度は「景観文化」の編集長にさせられ、いまは井上洋司さんに引き継ぎましたが、なかなか顧問にさせてくれませんでした。この機関紙は土田さんの尽力でリストをつくって、行政の景観関連の担当者とアカデミー50~60箇所に無料で配布しています。各号700部の発行だったのが、最近では1,000部発行しています。

この団体をJUDIと一体化できないかと私は思うのですが、なかなか難しいですね。栗原裕さんと井上洋司さんなどはJUDIとTDAの双方で頑張っておられます。

## 「つくる」時代から「守る・維持する」時代へ

—JUDIの取り組みで評価できるものはどのようなものでしょうか？

**曾根：**私見ですが、JUDI関西は随分頑張っていると思います。私はお付き合いがないのですが、鳴海先生や学芸出版の前田さんがいたからではないかと東京の皆さんがうらやましがっています。東京でも都市デザイン関連の異業種交流はうまくできていると思いますし、啓発運動もそこそこ成功していると思います。

—一方で、課題としてはどのようなことがあるとお考えでしょうか？

**曾根：**これからの世代にお願いがあるとすれば、一つは建築や都市計画が中心になっていますから、ハードの専門家だけになっていますが、ソフトを扱う人文系の専門家にもいて頂いたほうがいいように感じます。歴史とか民俗学とか地理学とか。特に関西にはそういう分野の専門家の伝統があるはずですが。今は「つくる」時代から「守る・維持する」時代になっていますからね。

また二つ目は、JUDIは「良質な環境」の向上について、市民に理解してもらうための啓発運動体だと理解していますので、専門家や材料メーカーなど土木、建築の専門家だけでなく、時にはまちづくり活動をする一般市民が参加できるようなイベントを開催するといった工夫も必要だと思います。例えば、私の住む杉並区には「JIA杉並地域会」という会がありますが、ここでは年4回、「土曜学校」という一般区民が参加できる催しを開いており、「講座」や「まちあるき」を続けています。これは7年ほど続いており、最近2回目の印刷物を発行しました。

## 編集やチームビルディングの重要性

—都市環境デザインに取り組む上での時代の変化をどのように感じておられますか？

**曾根：**私は30歳の時に独立していますが、26歳の時にはもう代々木体育館の製図引きをやっていました。その当時は、日中は駒場に図学を教えに行き、夜には丹下研究室でいろんな仕事を手伝ってと、大学の助手になったのかアトリエで雇われたのか、よく分からない状態でした。少なくとも3、4種類の活動が同時に動いていて、どうなっていたのか自分でもよく分からない(笑)。それに比べるといまは大きな会社が仕事を全部持って行って、若い人の活躍の機会が少なくなっていますね。よく分からないけど大きい組織の方が安心だから、ということで仕事が出されることが多いように思いますが、発注の仕組み

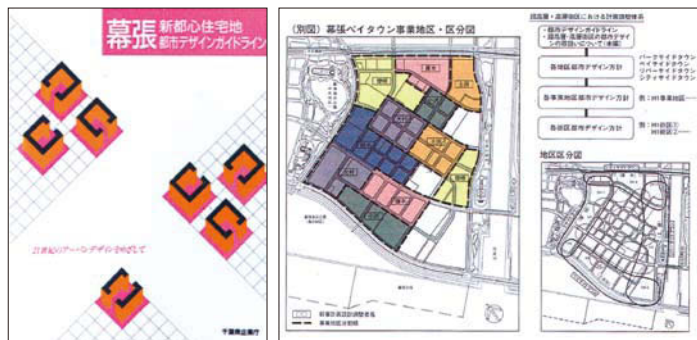
によって仕事の質は大きく変わると思います。コラボレーションじゃないときちんと仕事ができないと分かっている人が少ないですね。

—様々なジャンルの専門家がコラボレーションすることの重要性をどのようにお考えですか？

**曾根：**コラボレーションはたいへん重要です。戦前の満州などでは土木、建築、造園などが一体になって頑張ってきたけど、戦後は職域が細分化したせいか、なかなか難しい面があります。市街地であれば都市土木と建築にはひどい乖離があると思っています。私は建築家の能力というのは、設計やデザインというクリエイティブなことだけではないと思っています。編集とかコラボレーションとか、あるいはチームをつくるとか、そんなことも建築家にとって重要な能力だと普段から感じています。手を出さない建築家というのか、アーバンデザイナーというような調整役がコラボレーションには必要です。

私はちょうどJUDIを立ち上げた頃から、「幕張ベイトウン」の事業に参加しました。渡辺定夫さんと蓑原敬さんが千葉県企業庁と取り組んでいて、1985年には「幕張新都心基本計画」が策定され、概ねの土地利用が決まっていました。私が参加したのはそのあとです。都市デザインガイドラインというものをつくるのと同時に、それを運用して実際にまちをつくって行くチームを組織するというのを両方やりました。民間事業者6グループと公社・公団の1グループの合計7つのグループそれぞれに「計画・設計調整者」という役割の建築家を付けました。この費用は各事業者から出してもらう仕組みにしました。渡辺さんと蓑原さんだけは役所からお金をもらって、あとの7人は民間からお金をもらう。ただし、調整者の決定は企業庁の役割で、パブリックな立場から指名する。

事務局をやって頂いたのは市浦事務所です。富安秀雄さんという千里ニュータウンで大活躍した長老が号令をかけてくださって、市浦事務所の若い人たちが中心になって事務局を担って頂いて、調整者の調整者と言いますか、いろいろと支えてくださいました。まちのイメージをつくる段階では、蓑原さんとシーラカンスの小嶋さん、工藤さんなんかが一番動いたと思いますね。



幕張ベイトウン事業地区と計画調整体系



幕張ベイタウンの街並み（16番街と18番街）



都市デザインワークショップの様子



打瀬東通りからの眺め

## 慎重で丁寧なコラボレーション

—そのような仕組みをつくれる時になにか参考にされた事例がありましたか？

**曾根：**例えば、公団でも多摩ニュータウンでマスターアーキテクト制度を用いるなど、いろいろとそういう体制づくりが模索されていた時代でした。一番参考にしたのは、ニューヨークのバッテリーパークの開発です。チームを編成して、会議体で進めていこうというのを決めました。20年で実に100回以上も会議をやっています。各チームには建築家もいるし造園とか照明の専門家もいる。その人たちが提案するものを隣の街区のチームとひとつずつ調整していくのをやってきましたから、それはすごいエネルギーがかかっています。まあ、事業者からすれば、なんて面倒な仕組みなんだ、という感じだったと思いますがね（笑）。

—各企業グループと調整者とのマッチングの際に気を付けられたことはありますか？

**曾根：**それはかなり慎重にやりましたね。最初から決まっていたメンバーは私と大村慶一さんだけで、あとは人選をいろいろ考えました。藤本昌也さんや小沢明さんは私が誘っていますね。土田さんも私が誘ったかな。三井所清典さんは公団からの推薦だったと思います。都

市工一期の鈴木宗英さんは事業者側とはやくからつながりがあった。結果的にメンバーの半分は都市工時代からのグループですね。例えば、この企業は重役に早稲田の人が多から藤本さんにしようとか、小沢さんは横浜でこの企業とやっていたからとか、そういうことをいろいろと想像しながら声をかけていきました。コラボという体制を建築家だけでなく、造園、色彩、照明などの皆さんの役割を一番意識してバランスよく継続したチームは土田さんのところだったような気がします。最近、JUDIのメンバーでもある関西大学の江川直樹さんに、私の小論を「団地再編叢書」という冊子に纏めていただいていますので、是非お読み下さい。

—その他にコラボレーションを支える仕組みにはどのようなものがあるでしょうか？

**曾根：**もう一つ重要な点があるとすれば「顕彰」の話です。これは随分古い45年も前の「大阪万博」です。この成果について建築学会は「会場のレイアウト」に対して「建築学会特別賞」というものを出している。しかし対象は複数のタレント建築家が入っていますから、誰がもらったのかは明白じゃない。私は自分たちがやったという自負があるから経歴にも書いていますが、社会的には抹殺されています。大阪万博は、1964年の東京オリンピックに継ぐ国家プロジェクトでした。このプロジェクトのハード面を推進したのは、前半が西山卯三先生のチーム、後半は丹下健三先生のチームと都市計画学会が決めたのです。院生を終えて新設の都市工学科の助手をしていた私は、駆け出しでしたが両プロジェクトに参加しました。博覧会協会が大阪の本町にありましたから、私たちは関西に出張。上田篤さん、川崎清さん、加藤邦男さん、佐佐木綱さん、末石富太郎さんといった京大の先生がたや若い皆さんとここでお付き合いしました。武田さんの研究室を創設された久保先生の紹介で都田徹さんなどにお逢いしているのもこの時です。「お祭り広場」や「人工湖」はその時からのコンセプトです。モントリオール博の会場視察に関東から私だけ参加したせいもあって、テーマをはじめ、ソフト面を支えた梅棹忠夫さん、小松左京さん、加藤秀俊さんといった先生がたにも可愛がって頂きました。後半は東京の原宿での作業です。会場計画では関西も含め、多くの設計事務所か

ら出向頂いた若い皆さんと一緒にした。岡本太郎さんの「太陽の塔」が計画されるのはこの後半です。博覧会の誘致そのものに熱心であった堺屋太一（池口小太郎）さんが通産省の担当官で、冷戦時代で、日本、アメリカ、ソ連が三大パビリオンになるとのことから、拠点を決めて165haあった場内のパビリオン用地を敷地割したのです。計画は暗黙のなかに都市というメタファーがありました。

いま、このアーカイブが東京国立近代美術館で開かれています。その時の話をカタログに書いていますが、学会賞というのは個人の作品か業績でないとダメなのかと今でも不思議に思っています。「幕張ベイタウン」も学会賞に出そうとしましたが、ダメでした。

JUDIにも顕彰制度はあるでしょうけど、一つのプロジェクトで複数の人が受賞できるものを創設するといいいですね。コラボでの成果を評価することに比重をおいた映画とかアニメの世界みたいなものも調べる必要があるかも知れません。

## 「場所性」と「没場所性」

——総合的な都市環境へのアプローチにおいて重要なことは何でしょうか？

**曾根：**JUDIは都市計画や土木、造園、照明、色彩、サイン、建築などを勉強した人が主体になってつくられました。建築家が少ないのは、他にも団体が多いからか、関心が少ないからでしょうか。建築には「創造」や「デザイン」という側面がありますが、都市は複雑系でできている。「計画」もありますが「継続」や「保存」もある。私は、建築には「創造」（＝先端的）が大事だと思いますが、都市環境は「普通」でできているのだから、「都市環境デザイン」はそのことを考えて良質な環境に導いていく技能（スキル）が大事だと思います。

人間も虫や鳥のように巣（家）をつくることから始まって、生活環境をつくってきたと考えることが出来るのですが、資本主義と工業化（技術化）の中で「都市」を生んできた。そこに介在してきたのが土木や建築の技術だと言えます。例えば、エドワード・レルフの書いた地理学の本「場所の現象学」では、「場所性」と「没場所性」が別けて論じられています。「場所性」は地勢や歴史、思い出など複雑系でできている佇まいです。彼ら（地理学の人）がとりあげているのはC.アレクサンダーとかイギリスのG.カレン、それに近代建築を批判したジェーン・ジェイコブスなどで、都市計画はユートピア主義だと批判的な傾向があります。「没場所性」は資本主義と工業化で機能的にできていく「都市」のことを指しています。ここでは「場所性」が失われ、機能が優先される。これは重大な指摘だと思います。著者は必ずしも「没場所性」を否定はしているわけではありませんが、また「隠喩としての建築」を書いた柄谷行人なんかも同じこと言っていますね。

——そのようなスキルのためにはどのような取り組みが必要でしょうか？

**曾根：**最近、TDAでは「景観アドバイザー会議」という催しを始めています。倉田直道さんに仕掛け人をお願いしていますが、景観アドバイザーと行政の方に集まっていただき、東京23区などの行政ごとに、何を対象にどのような活動をしているのかを情報交換しています。先日、2回目が都庁の会議室で開かれました。これがなかなか面白い。資本主義的でグローバル化した都市開発に対して「場所性」という問題を設定して、歴史や地理といったものをベースに「昔の佇まい」の形姿を現代の方法で要請しているという点では、各地域とも共通しています。一方で、もっぱら開発事業者の説得に終始して、市民が顔を出さないのは気になります。「自然都市」でなくとも斑になった「複雑系」があちこちに出現するのは、やはり景観アドバイザーあつてのことだと期待を持ちます。

## 人と人とのつながりとは

——最後に若い世代に向けたメッセージをお願いします。

**曾根：**大したことは言えませんが、一つだけ気になる点はIT化した社会の問題です。わが国の戦後は、核家族化、個室住居化、行政化と、コミュニティが崩壊してきて消費社会化がますます進んでいます。この前県庁に勤める55歳くらいの方と話をしたら、彼は明確ではないけどある時期から行政の仕事が猛然と増えたことを肌で感じていると言っていました。行政化というのは個人が国家（行政）と直接結びつくことを意味する。自助、共助、公助なんていう言葉ありますが、いまは共助という中間がなくなっている。社会学者の宮台真司などはこの辺を明確に述べていますね。

現在はIT化の時代ですが「スマホ」で済ませる情報と「顔を見ながら」会話する情報とは全く別な（重さが違う）ものだと思います。書物や講義で勉強することも勿論重要ではありますが、パソコンやスマホというITと直接的な会話の情報とは是非区別していただきたいと感じています。いま、私は二つの会合を意識的に別けて行動しています。一つは自分の地域の仲間での会合。これは先ほどのJIA杉並地域会とか建築士会とか事務所協会ですが、杉並区ではこれをまとめた「杉並建築会」というものがあります。年1回の大会を開くだけですが、この会ができたおかげで、行政と「まちづくりに関する協定」などを結んで、つながりが上手くできるようになりました。もうひとつがTDAの会合です。自分ではコミュニティの会合とアソシエーションの会合みたいに別けて考えています。お酒が好きですから会合の後はたいい飲みますね。その時の会話はくだらない話が過半ですが、重要な示唆も沢山あるものです。

記録：武田重昭（大阪府立大学）